大阪インターナショナルチャーチ ダニエル・エルリック牧師

タイトル: 喜びを得る

シリーズ: 使徒言行録# 46

聖書箇所: 使徒16:16-40

特別行事:

2013年3月24

中心聖句: 使徒26:34

## I. 導入

おはようございます。子どもは好奇心が旺盛で、あらゆるものを美しい、おもしろいと思 える感性の持ち主です。世界は見たことのないものばかりでわくわくするのです。残念ながら、そ のような感受性は大人になるにつれ失われていきます。さまざまな責任が重くのしかかり、生活に 追われて疲れてしまうからです。けれども、私たちがイエスをしっかり見つめるなら、かつての感 動を取り戻し、新しい喜びを経験することができます。

幸福は周りの状況に左右されると言われます。一方、喜びはそうではありません。どのよ うな姿勢を持とうとするか、心の在り方次第です。今日の聖書箇所には、状況に負けない喜びの さまが見事に描かれています。

この数週間、パウロの第二次宣教旅行のできごとを追ってきまし た。今日の話は、パウロとシラス、テモテ、ルカが皆フィリピにあるリ ディアの家に滞在しているところから始まります。では、**使徒16:6-15**を読 みましょう。



# II. 聖書朗読 (使徒言行録16:16-25, 新共同訳)

16:16 わたしたちは、祈りの場所に行く途中、占いの霊に取りつかれている女奴隷に出 会った。この女は、占いをして主人たちに多くの利益を得させていた。16:17 彼女は、パ ウロやわたしたちの後ろについて来てこう叫ぶのであった。「この人たちは、いと高き神 の僕で、皆さんに救いの道を宣べ伝えているのです。」16:18 彼女がこんなことを幾日も 繰り返すので、パウロはたまりかねて振り向き、その霊に言った。「イエス・キリストの 名によって命じる。この女から出て行け。」すると即座に、霊が彼女から出て行った。

16:19 ところが、この女の主人たちは、金もうけの望みがなくなってしまったことを知 り、パウロとシラスを捕らえ、役人に引き渡すために広場へ引き立てて行った。16:20 そ して、二人を高官たちに引き渡してこう言った。「この者たちはユダヤ人で、わたしたち の町を混乱させております。16:21 ローマ帝国の市民であるわたしたちが受け入れること も、実行することも許されない風習を宣伝しております。」16:22 群衆も一緒になって二 人を責め立てたので、高官たちは二人の衣服をはぎ取り、「鞭で打て」と命じた。16:23 そして、何度も鞭で打ってから二人を牢に投げ込み、看守に厳重に見張るように命じた。 16:24 この命令を受けた看守は、二人をいちばん奥の牢に入れて、足には木の足枷をはめ ておいた。16:25 真夜中ごろ、パウロとシラスが賛美の歌をうたって神に祈っていると、 ほかの囚人たちはこれに聞き入っていた。

### III. 教え

ガンギテス川のほとりにある祈りの場で、パウロはイエス・キリストの福音をリディアに伝え、彼女は歴史で知られる限りヨーロッパ初のクリスチャンとなりました。この後、パウロー行はリディアの家に滞在します。ある日、再び同じ場所に行くと、奇妙なことが起こりました。使徒16:16a「わたしたちは、祈りの場所に行く途中、占いの霊に取りつかれている女奴隷に出会った。」



ここにはいくつかの問題が掲げられています。第一に、奴隷問題です。奴隷制は、歴史上 絶えず存在してきた悪です。聖書が奴隷制に対して真っ向から非難しない点について、みことばへ の批判が持ち上がることがあります。聖書は、私たちの住む世が堕落した世だと教えます。そし て、この世には諸悪が存在するとも教えます。この堕落した世の中で、人の命はみな尊く、一人ひ とりが神に愛されていると聖書は語ります。聖書は奴隷制を直接禁じていません。けれども、人 は身分にかかわらず神の前に平等であると主張します。

ガラテヤ3:28はとくに重要な箇所です。「そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。」この個所をはじめこれに似た個所から、神が奴隷制を是認しておられないことは明らかです。聖書は、人が皆平等であるという土台に立っていますから、奴隷制が悪であり、キリストを受け入れた人は奴隷制を否定しなけれ



ばならないことは明白です。残念なことに、教会がこれを実行に移せなかったこともありますが、一般的には、世界中のどの時代にも、クリスチャンは奴隷制根絶の第一線で戦ってきました。隣人を愛するなら、その人が奴隷にされるのを受け入れられるはずがありません。とは言え、新約時代、少数派だったクリスチャンに政治的な力はありませんでした。彼らにとって、福音を告げ知らせることが最優先事項だったのです。

ここ使徒16:16に掲げられたふたつめの問題は、占いです。こうあります。(**使徒16:16b**)「占いの霊に取りつかれている女奴隷に出会った。この女は、占いをして主人たちに多くの利益を得させていた。」聖書は、多くの個所で占いや占星術、霊媒など私たちを神から遠ざける悪習を非難します。創造主なる神を信じる私たちは、すべてが神の御手にあることを認め、神のみにすべての願いや悩みの答えを求めるべきです。神以外の何物にも頼ってはいけません。

この女奴隷の占いが本物かただの出まかせかはわかりません。たいていの占い師はあいまいなことを言って、お金を取ります。この場合は、悪霊が働いていました。聖書の教えによると、神のみが本当に未来を予見できるお方です。しかし、悪霊を軽く見てはいけません。悪霊は未来を予見することはできなくても、女奴隷の口から予言をさせ、悪霊同士結託して、予言の内容を実現させようとすることもできます。極端な例を言うと、この悪霊に取りつかれた女奴隷がもうすぐ誰かが死ぬと予言したとします。すると他の悪霊が誰かに殺人をするよう



に誘惑します。するとその予言は実現するのです。聖書は悪霊と関わらないようにと警告しますが、それなりの理由があるわけです。エフェソ6:11はこう勧めます。「 悪魔の策略に対抗して立つ ことができるように、神の武具を身に着けなさい。」

悪霊に取りつかれた女奴隷の行動はとても興味深いものでした。**使徒16:17**,「**彼女は、パウロやわたしたちの後ろについて来てこう叫ぶのであった**。『この人たちは、いと高き神の僕で、皆さんに救いの道を宣べ伝えているのです。』」ここから、汚れた霊でさえ、真実を語ることがあるということがわかります。この女奴隷がどうしてそのようなことを言ったのかわかりませんが、これが何日も続いたので、パウロはずいぶん不快に感じるようになりました。

使徒16:18b「パウロはたまりかねて振り向き、『イエス・キリストの名によって命じる。この女から出て行け。』すると即座に、霊が彼女から出て行った。」ここでパウロが霊を追い出した動機にはあまり感心しませんが、イエスの名によって語れば霊が必ず従うという確信を彼は持っていました。私たちもそうでありたいものです。主を信頼して、イエスの名によって語るなら、悪霊も私たちに服従するのです。それは、私たちのうちに聖霊がおられ、悪霊は神の御霊に逆らうことができないからです。



この女奴隷は、悪霊から解放され、おそらくイエスを信じて弟子になったでしょう。しかし、そのことは記されていません。パウロのしたことは、女奴隷にとって祝福でした。自由にしたのですから。けれども、女奴隷の主人たちは怒りました。儲け口が閉ざされたからです。占いは彼らにとって稼ぎのよい商売だったのに、パウロのせいでその商売が続けられなくなってしまったのです。そこで彼らはパウロとシラスを捕まえて、役人に引き渡し、ありもしないことで彼らを訴えました。

使徒16:22「 群衆も一緒になって二人を責め立てたので、高官たちは二人の衣服をはぎ取り、『鞭で打て』と命じた。」裁判もなく、パウロとシラスに弁護のチャンスも与えられないまま、厳しい裁きが横暴にも下されました。パウロとシラスは服をはぎ取られ、何度も鞭打たれて、牢に入れられました。



看守は、ふたりを牢の一番奥に入れ、足かせをはめました。これは、フィリピの遺跡の写真です。この場所に、パウロとシラスが投獄されたと考えられています。あなたならどうでしょう。無実の罪で訴えられ、服をはぎ取られて鞭打たれ、寒くじめじめした石の牢に犯罪者たちといっしょに入れられたら、どうしますか。



確かに、人はその置かれた状況に影響を受けます。しかし、それに どう向き合うかは私たち次第です。ユダヤ人のヴィクトール・フランクル は、第二次世界大戦中、ナチスの強制収容所に収容されました。家族と引き 裂かれ、持ち物はすべて没収されました。ナチスは彼の名前まで取り上げ、



119,104という番号を割り当てました。ヴィクトールはすべてを失ったと思うでしょう。けれども、そのような暗闇の中で、彼は愛を信じ、自らの苦しみに意義を見出そうとしました。彼は囚われ人でしたが、前向きな姿勢を保ちました。ヴィクトール・フランクルは、このように語ります。「どのような状況になろうとも、人にはひとつだけ自由が残されている。それは、どう行動するかだ。」

パウロとシラスは、ヴィクトール・フランクルにきっと共感したでしょう。ふたりも、置かれている状況の良い点に目を向けました。そこには、目を向けるべき素晴らしいことがあったのです。使徒16:25「真夜中ごろ、パウロとシラスが賛美の歌をうたって神に祈っていると、ほかの囚人たちはこれに聞き入っていた。」パウロとシラスは、その場所に神がと



もにいてくださることに気持ちを集中させました。ふたりがいたことで、牢は礼拝堂になりました。神に祈り、賛美の歌をうたったのです。ふたりは神を賛美し、主の愛とご誠実に感謝しました。

では続いて、使徒16:26-40を読みましょう。

# IV. 聖書朗読 (使徒26:26-40, 新共同訳)

16:26 突然、大地震が起こり、牢の土台が揺れ動いた。たちまち牢の戸がみな開き、すべての囚人の鎖も外れてしまった。16:27 目を覚ました看守は、牢の戸が開いているのを見て、囚人たちが逃げてしまったと思い込み、剣を抜いて自殺しようとした。16:28 パウロは大声で叫んだ。「自害してはいけない。わたしたちは皆ここにいる。」16:29 看守は、明かりを持って来させて牢の中に飛び込み、パウロとシラスの前に震えながらひれ伏し、16:30 二人を外へ連れ出して言った。「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか。」16:31 二人は言った。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」16:32 そして、看守とその家の人たち全部に主の言葉を語った。

16:33 まだ真夜中であったが、看守は二人を連れて行って打ち傷を洗ってやり、自分も家族の者も皆すぐに洗礼を受けた。16:34 この後、二人を自分の家に案内して食事を出し、神を信じる者になったことを家族ともども喜んだ。16:35 朝になると、高官たちは下役たちを差し向けて、「あの者どもを釈放せよ」と言わせた。16:36 それで、看守はパウロにこの言葉を伝えた。「高官たちが、あなたがたを釈放するようにと、言ってよこしました。さあ、牢から出て、安心して行きなさい。」

16:37 ところが、パウロは下役たちに言った。「高官たちは、ローマ帝国の市民権を持つわたしたちを、裁判にもかけずに公衆の面前で鞭打ってから投獄したのに、今ひそかに釈放しようとするのか。いや、それはいけない。高官たちが自分でここへ来て、わたしたちを連れ出すべきだ。」16:38 下役たちは、この言葉を高官たちに報告した。高官たちは、二人がローマ帝国の市民権を持つ者であると聞いて恐れ、16:39 出向いて来てわびを言い、二人を牢から連れ出し、町から出て行くように頼んだ。16:40 牢を出た二人は、リ

ディアの家に行って兄弟たちに会い、彼らを励ましてから出発した。

## V. 教え

フィリピで起こった地震は、大地震でした。牢の戸が開いただけでなく、囚人がつながれていた鎖まで外れてしまったのです。神はパウロとシラスを自由にしました。実際、囚人全員が自由になったわけですが、誰一人逃げませんでした。パウロとシラスの説得力ある証を聞いたからに



違いないと思います。囚人たちは皆、パウロとシラスが神を賛美するのを見聞きしたので、逃げられる状況でも逃げなかったのでしょう。

当時、囚人を逃してしまった看守は死刑にされました。地震の後で牢の戸が開いているのを見て、看守は少なくとも何人かの囚人は逃げてしまっただろうと思いこみました。そして、死刑にされるのを待つより、自殺しようとしました。使徒16:28-29「16:28 パウロは大声で叫んだ。『自害してはいけない。わたしたちは皆ここにいる。』16:29 看守は、明かりを持って来させて牢の中に飛び込み、パウロとシラスの前に震えながらひれ伏し、」



そこで看守は、非常に重要な問いかけをします。パウロはそれに、唯一の真理で答えます。使徒16:30-31「16:30 二人を外へ連れ出して言った。『先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか。』16:31 二人は言った。『主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。』」 信じて救われなさい。あまりにもシンプルですが、なかなかできないと思う人が多いようです。パウロの答えが受け入れがたいのは、行いを否定するからです。看守は、懺悔をしたり、献金したりするようには求められていません。また、自尊心を否定するからです。パウロの答えは、自分自身ではなくイエスを信じるよう求めます。パウロによれば、どれほどの善行や善意も、救いを得るには不十分だというのです。

主イエスを信じなさい。イエスを信頼しなさい。イエスを頼りとしなさい。イエスを主であり救い主として受け入れなさい。私たちは行いによって救われません。私たちのためにイエスがすでに成してくださったことによって救われるのです。イエスは弟子たちに仕える者になりなさいとおっしゃいました。けれども、それは救いを得るためではありません。イエスに似た者となるためです。マルコ10:45「人の子は仕えられるため



ではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」イエスはご自身の命を私たちのために代価としてささげてくださいました。罪の罰として死を受けるべき私たちのために、イエスは身代わりとなって死んでくださいました。このお方のおかげで、私たちは永遠のいのちを無償でいただけます。信じて救われましょう。

使徒16:33-34「16:33 まだ真夜中であったが、看守は二人を連れて行って打ち傷を洗ってやり、自分も家族の者も皆すぐに洗礼を受けた。16:34 この後、二人を自分の家に案内して食事を出し、神を信じる者になったことを家族ともども喜んだ。」 牢で、パウロとシラスは喜びを見出し

ました。主がともにおられることを知っていたからです。こうして、フィリピ人の看守と家族も、同じ喜びを得ました。それは、主の喜びです。

使徒16:40「牢を出た二人は、リディアの家に行って兄弟たちに会い、彼らを励ましてから出発した。」その夜は、皆が大喜びだったでしょう。きっとリディアはお祝い会を開いたことでしょう。パウロとシラスが牢から解放されたことと、フィリピ人の看守が新しく信仰に入ったことを祝うためです。一方、宣教チームはその成功に寄りかかってはいませんでした。まもなく他の町へと旅立ったのです。一行は、二家族の信徒に洗礼を授け、そこを後にしました。リディアと家族、看守と家族、そして、女奴隷など他の人たちも信徒になったかもしれません。フィリピの教会は、残された者が信仰を分かち合い、成長していきました。

### VI. 結び

この数年後、パウロはフィリピの信徒への手紙をしたためます。この優れた手紙のテーマは喜びです。注目すべきは、フィリピの信徒への手紙を書いたときも、パウロがイエスの名のために投獄され迫害を受けていたという点です。そのような状況でも、パウロの喜びがくじかれることは



ありませんでした。パウロはどんな状況下でも主イエスにあって喜ぶ術を身につけました。私たちも常に喜ぶ術を学べるようにと祈ります。

最後にフィリピ4:4-8. を読みましょう。耳を傾けてしっかり聞いてください。喜びに満ちたクリスチャン生活の秘訣がわかるでしょう。「4:4 いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。4:5 あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい。主は近いのです。4:6 何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。4:7 そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。4:8 最後に、兄弟たち。すべての真実なこと、すべての誉れあること、すべての正しいこと、すべての清いこと、すべての愛すべきこと、すべての評判の良いこと、そのほか徳と言われること、称賛に値することがあるならば、そのようなことに心を留めなさい。」

祈りましょう。

VII.祈り